
フェートン号事件始末

NOCSポッドキャスト台本

2012.10.31



NOCS

長崎卸センターサービス株式会社



はじめにお話をうかがったとき、時節に合致するし、面白いと思いました。

長崎奉行をはじめに、数人の役柄を演じるのですが、はじめてのことでなかなかイメージが湧かず、苦労いたしました。

NOCSさんにご相談しながら、それぞれの台詞のイメージを膨らましなが、漢字の読みに苦労しつつ、なんとか完成させましたが、果たして出来映えはいかがでしょうか。

長崎人にもなじみの薄い物語ですが、それにしても、長崎奉行松平康英さん。武士とはつらいものですね。

ポッドキャスト 読み手 やまだ眸月真

「ポッドキャストでの朗読台本を電子本にしてみました。ご自由にご利用ください」

企画・制作 NOCS長崎卸センターサービス株式会社

<http://www.nocs064.com/podcast>

責任者 笠瀬伸一郎

目 次

前解説

第 1 景 長崎出島オランダ商館カピタン部屋

第 2 景 長崎奉行所・書院・奉行座所

第 3 景 長崎出島オランダ商館・西水門

第 4 景 高鉾島・フェートン号停泊地

第 5 景 フェートン号船上

第 6 景 長崎奉行所・奉行座所

第 7 景 高鉾島・フェートン号泊地

第 8 景 長崎奉行所

第 9 景 高鉾島・フェートン号泊地

第10 景 長崎出島オランダ商館

第11 景 稲佐恵比須神社・長崎奉行御座所

第12 景 高鉾島・フェートン号泊地

第13 景 稲佐恵比須神社・長崎奉行御座所

第14 景 長崎奉行所・書院・奉行御座所

第15 景 長崎出島オランダ商館

後解説

解説

19世紀冒頭、長崎から 遠くはなれたヨーロッパでは、フランス発の大騒動となっていました。フランス革命、その勢力によるオランダ占拠、そして、オランダ国消滅。オランダ政府はイギリスに亡命し、海外資産保全・管理をイギリス政府に委託します。ところが、在バタビアの総督はイギリスへの管理委譲命令を拒絶。やむなく、イギリスは在インド東洋艦隊にバタビア占領と、収入源の遮断、つまり、オランダ商船の拿捕抑留（だほ・よくりゅう）を命じます。

船齢20年の老朽船フェートン号もはるばる東洋での商船狩りに投入されます。艦長は、イギリス海軍提督の子息、若干19歳のペリュー大佐。遠く喜望峰を回り、インド・ベンガルからマラッカ海峡を経由、ポルトガル領マカオへ。

そして、マカオでの船体修理の最中（さいちゅう）、オランダ船2隻が長崎に向け航行中との秘密情報を得ます。船体修理・食料補給もそこそこに、フェートン号は長崎五島沖に向かって出帆いたします。しかし……

第1景 長崎出島オランダ商館・カピタン部屋

長崎奉行所使者（澁刺とした様子・久々の阿蘭陀船来航に喜んでいる）

「ドーフ様はどちらに！ 野母崎の遠見番所（とおみばんしょ）から、オランダ船らしい大型船、接近中との知らせがありました。久々の来航じゃと、皆喜んでおりますが、ただ、風が変わるこんな時節に……と申されて、お奉行がご懸念のご様子。ドーフに意見を聞け、とのことでした。」

カピタン・ドーフ（オランダ船？かどうか懸念している。懸念を隠して楽観的に）

「ご懸念はごもっとも。戻り風で海も荒れる時節です。確信はありませんが、嵐を避けていたとか、洋上修理など、理由があったのでしょうか。お奉行には、「おそらくはオランダ船」と、お答えください」

【独白】（オランダ船であってほしい……が、イギリス船との確立は五分五分……か？）

「唐船の話では、イギリス軍艦のオランダ狩りが厳しいらしい。奴等の眼をかいくぐっての来航ならば、この時期でもありえる話だ。しかし、イギリス船だとすれば面倒だ。バタビアとの戦争とか本国消滅などを言い立てられれば、俺の立場は難しくなる。オランダ船ならばよいのだが……。」

カピタン・ドーフ（商館員たちには懸念を隠し表面的に事務的に指示を出している）

「スヒンメルとホーゼマン。入港手続に出向いてくれ。面倒だが、それが「きまり」だからね。乗員数と名前、そして、一人ずつ確認の「点呼」だ。役人は堅物だぞ。「積荷リスト」と「風説書（ふうせつがき）」を忘れないようにな。通詞と手順を確認して、手拔かりないようにね。役人どもがうるさいぞ。では、頼んだぞ」

第2景 長崎奉行所

長崎奉行・松平康英

（久方のオランダ船来航がうれしいが、立場上、はしゃぐわけにもいかない。職責上心配してみせなければならぬ。勿体ぶって聞いてみるか）

「待ちかねたぞ、カピタン・ドーフ殿。久しぶりのオランダ船だ。みな、喜んでいる。長崎の皆に恩恵があるからな。近頃、唐船の入船も少なく、不景気であったので尚更だ。知ってのとおり、異国船が度々各地に姿を現している。ロシアのように狼藉を働く国もある。江戸表も神経質だ。時季はずれの来航だが、面倒なロシア船などではなかろうな。」

カピタン・ドーフ

（ロシア？ イギリスの方が心配だ。俺も心配だったので、出島から確認してみた。多分、オランダ船だろう。奉行の懸念も取り越し苦労だろう。それはそれでいい。ちょっと安心させてやるか）

「出島の物見台にて、私も遠めがねにて、船尾のオランダ三色旗を見てまいりました。しかも、高鉾島沖のオランダ船に割り当てられた泊地に投錨いたしました。それから、オランダ船とみて間違いのないと思います」

第3景 長崎オランダ商館・西門

オランダ商館員スヒンメル（事務的に）

「旗あわせの「旗」は用意できたか。奉行所からの御用船が迎えに来たぞ。通詞の猪俣さん・上村さんと同じ船だ。ご検視役は杓子定規で有名な菅谷・上川のご兩人だ。高鉾島まで、ギイギイ・ユラユラで、小1時間近くはかかるな。

（うれしさを隠しきれず）それにしても、二年ぶり？ 長かった！ さてさて、オランダ本船ならいいのだが。それにしても、久々のオランダ・タバコに酒だ。連中から本国やバタビアの状況も聞けるし、久しぶりの国の酒だ……」

第4景 高鉾島・オランダ船停泊地

オランダ商館員スヒンメル（船の作りにちょっと違和感を感じ、不吉な思いがわき上がる）

「これはでかい船だ。砲門がいくつある。何人のっているんだ。なにかよそよそしいが、（不吉な感じでいっぱいになってきたが、事務的に）こりゃ、クルーの点呼が大変だぞ。（これはまずいかもしれぬぞ、焦燥感……）さてさて、後からついてくるはずの、ご検視役の船が遅れているが」

通詞・菅谷（オランダ商館員の不安・懸念には無頓着に。馬鹿にした様子で）

「検視役様は泳ぎに自信のなかけん、一番ふとか伝馬船がよかと言われて。船頭も今頃、大汗ば、かいたるでっしょう。追いついてくるまで、船んそばで待っときましょ」

オランダ商館員スヒンメル（だんだん不安がふくれあがってくる）

「乗員が覗き込んでおる。おおい、オランダ本船かどこかの傭船（ようせん）か？ 旗合わせの手順を間違えるなよ。船長はいるかぁ。（不安が一気に晴れて）おお、オランダ語だ」

オランダ商館員スヒンメル（やれやれオランダ船だ。安堵した様子で）

「そうだよ。オランダ商館員だ。スヒンメルとホーゼマンだ。ご検視役が到着するまで、もうすこし待ってくれ。船長か航海士はいるか？ 船長はどこにいる？

（船員の態度をみてまた不安が持ち上がる）様子がおかしい。どうして船長が顔を出さない。

あれ、ボートだ。（予想外の事態に慌てて）武装している。変だぞ。抜刀しているじゃないか。銃も撃鉄が上がっているぞ。おいおい。（なにがなんだかわからない）ご検視役はまだか・・・？ オランダ語だ・・・」

ボート先頭の士官（軍人らしく。事務的に。威圧的に）

「オランダ商館員だな。君ら二人を逮捕する。ただちに、こちらのボートに移乗せよ。さもないと発砲する」

オランダ商館員スヒンメル（意外な展開・・・事態のみこめないが、異変だとは分かる。責任感から、きっぱりと）

「これは本気だ。危ない！。君ら通詞は海に飛び込め。異変を伝えるんだ。こいつらオランダ人ではないぞ」

第5景 フェートン号船上

英艦艦長ペリユー大佐（貴族風に優雅な様子で）

「おお、オランダ商館員のお二人か。ようこそ、この船へ。」

オランダ商館員スヒンメル（きっぱりと）

「下手なオランダ語だ。どういうことだ。オランダ船ではないな？ どうして国旗を偽る。なにが目的だ」

英艦艦長ペリユー大佐（貴族風に優雅な様子で）

「まあ興奮するな。生かすも殺すも私の胸三寸だぞ。自分の立場をわきまらんだな。ということで、反対に、こちらから質問する。この港にオランダ船が来航しているはずだ。どこに停泊している。積荷倉庫はどこだ。そして、商館の場所と商館長の名前。全員で何名だ。そして、ここの防備体制はどうなっている」

オランダ商館員スヒンメル（イギリス人と悟った・・多少落ち着きながら）

「イギリス人か？ （侮蔑するように）オランダ船をかたっての侵入。侍たちは礼儀と信義を重んじる。こんなやり方、かれらは黙っていないぞ。それにオランダ船など何年も来ていない」

英艦艦長ペリユー大佐（ちょっと気色ばんで、多少早口になる）

「侍・・・・私も知らんわけではない。（きっぱりと）だから、君たちがここにいるんだ。（意地悪そうに）オランダ船はいない・・・と君たちは言った。調べさせてもらう・・それまで留まってもらう。大人しくしている。いればマカオまで連行し、いなければ「とっと」と戻るまで。（脅迫するように）場合によっては、おまえらも連れて行く」

第6景 長崎奉行所西役所 奉行書院

【第1場】

奉行所役人（大慌て、早口で）

「異変出来（いへんしゅったい）です。商館員2名が拉致されました。「オランダ船なりや」との問いかけに、「そうだ」との返答。油断させんがための方便でした。いきなり、船影からボートが現れ、銃口をむけ有無を言わせず、商館員を船上に連れさりました。通詞・船頭は海に飛び込み難を逃れました。あまりのことに、近づいて「なにものなるや。蘭人拉致とはいかなることぞ」と呼びかけましたが、筒口を向け威嚇される始末。恥を忍んで、ご報告第一と戻ってまいりました」

長崎奉行・松平康英（あまりの慌てぶりに、武士でありながら・・・侮蔑の気持ちも起こってきて）

「なに、おめおめと・・・！！！！ よし分かった！！！！ それなら、またすぐ、おまえらで「かの船」に行き蘭人を取り帰してこい。（ますます激高）果たすまで戻ってくるでない！ この腰抜けめ」

【長崎奉行・独白】

「（一呼吸おいて、冷静さを取り戻すまで多少の間、つぶやくように）オランダでない？ ロシアか？ ロシアなら、なぜ国旗をいつわる。（ゆっくりと考えながらつぶやく）なにものだ。（思い当たったようにきっぱりと、そうだ！という感じで）カピタンを呼び戻せ。（そして能吏らしく、てきぱきと）市中に散った同心らを呼び帰せ。（やや嫌そうに、声のトーンも落ち気味で）それから、竹原屋敷の目付殿にも委細をお伝えせよ」

【長崎奉行所・場面展開・第2場】

長崎奉行・松平康英（待ちかねたドーフが到来し、冷静さを装いながら、早口になったり、ゆっくりとったり、満腔の不安感を知性で押さえた感じで。銃を突きつけられたような感じで）

「ドーフ殿。どう思う。いかなる意図か、商館員を拉致したが、やつらに動きはない。礼儀を心得ぬ野蛮人だ。貴殿、ヨーロッパ語には堪能であろう。手紙をやって探ってみてくれ。（大仰に）ご公儀のご威光に服し、（それが当然のことという感じで）大人しく武装を解き、乗船を認め、委細を説明するように、言ってやってくれ」

カピタン・ドーフ

「ただちに、手紙を送ってみましょう。しかし、偽計をもちいた入港です。（俺に落ち度はないぞ）海賊同然の振る舞いですな。いや、（海賊に力を込めて）海賊かもしれませぬ。（俺の推測を蒸し返すなよ！きっぱりと）和戦両方のご配慮が必要かと思えます。（これが大事。印象つけるように、重々しく）ただ商館員が人質です。なにとぞご配慮を」

長崎奉行・松平康英

（オランダ人、人質・・・こちらはそれどころではない。ちょっとむっとした感じで）

「オランダ人の命。粗末にはしないが・・・、ともかく、さあさあ、早く手紙を送ってくれ」

【独白】ドーフ（つぶやくように）

この手のやり方はイギリスだろう。汚い手を使う。余計なことを吹き込まれたくないものだ。接触させぬよう動かねばならぬが、まずは商館員を取り戻した。談判には噛んでおかねば。オランダの利権は守り抜かねばならぬ。ともあれ相手の出方次第か・・・まずは手紙からだな・・・。

【長崎武将所・場面展開・第3場】

奉行所役人（慌てた様子で）

「出島見張番から急報！！ 大型ボートが三艘、出島に一路向かってきている由でございます。月明かりに、遠目ですが、大砲も見えるところで、見張番が大慌てで指示をあおいでおります」

長崎奉行・松平康英（しまった。先手をうたれた・・・）

「守備兵は何人だ。奉行所から連れて行けるだけ連れて行け。急げ。商館員たちはいざとなれば奉行所に連れてこい。鉄砲火薬も必要なだけ持っていけ。火をたけ、旗を立てよ！ 守備兵が多数だと見せかけよ。」

奉行所役人（あきれたように）

「大型ボートは、明々とランプを灯し、傍若無人、あるものは水深を図り、あるものは大砲を積んだまま港内を探っております。見物の町人どもが「こりゃ戦じゃ」と騒ぎ出しております。長崎市中、桜馬場や、茂木めがけて、町人どもが大騒ぎです。風頭にも大勢が逃げ上り、市中は灰神楽がたったようで、一通りの騒動ではござりませぬ」

長崎奉行・松平康英（やれやれ・・・捕り方はなにをしているのか・・・不審な様子）

「深堀番所や奉行所の「捕り方」はどうした。どうして捕縛に向かわぬ。なにをしているのだ」

長崎奉行所役人（気後れして・・・答えにくそうに）

「相手は大型のバッテイラで船足も速く追いつけませぬ。船頭たちも怖がって、ぐるぐる回るばかりで、近寄りたがりません。迫っても脅され、遠巻きにするばかりで、到底、捕縛などは（残念そうに）無理だと」

長崎奉行・松平康英（なんだ・・・後手後手か・・・いらいらした感じで）

「なんとか一艘でも引っ捕らえられぬか。それと、出島の備えはもう大丈夫だな」

奉行所役人（これは、しっかり、やってるぞ・・・と、きっぱりと）

「此方の備えを見てか、それぞれ向きを変えて港内に散っておりますし、それぞれ動きを見張っております。出島襲撃・上陸は諦めたように見受けられます」

【長崎奉行所・場面展開・第4場】

奉行所役人（せかされたように・・・せいた様子で）

「出島沖の岩の上にスヒンメル殿が取り残されていました。いずれかのボートから降ろされたようで、スヒンメル殿を拾い上げ、ここに同行しております。カピタンへの書状を持参しております」

長崎奉行・松平康英（動きをみせてきたか・・・と、事態が動き出したことに、多少の安堵感。しかし、態勢がととのわずいらいらしている）

「どういう中身だ。それに、どうだ、市中の騒擾は収まったか。町役人らにきつく対処させよ。物盗や付火・失火がでるぞ。火消組を待機させよ。火事となれば、かの船どころではなくなる。はよう・・・いたせ、はよう・・・伝えよ」

長崎奉行・松平康英

（お目付がくる・・・陰気で杓子定規、監視役のこの人物は丁重な扱いが必要だが、嫌い。）

馬鹿丁寧に、相手をたてながら・・・口出ししないように・・・慎重に対応せねば・・・という感じ)

「これはお目付。わざわざのお運び恐縮至極。この騒動。異国船が入港しオランダ商館員を人質といたしております。いまのところ、どこの船かわかりませぬが、商館員の一人が手紙を持参して戻り、食料・薪水の提供があれば、人質を戻し退去する旨言ってきました。町人どもが先走り、乱戦をおそれて、騒ぎ出しておりますが、今、奉行所をあげて沈静化に努めております。現時点では、和戦両様で準備を始め、今後についてはお目付にご相談せねばと思っておりました」

目付(面倒なことになった・・・おれに相談・・・冗談じゃない・・・幕府のきまりがある・・・それにそって動けばいい・・・ここは目付らしく権威をもって、奉行には俺様の権威を思い知らさねばならぬ)

「図書頭殿。これは重大事。先年、ロシア船が千島樺太に出来(しゅったい)し、遮二無二、交易を求めてきたが、「あいならぬ」の一言で引き下がった。こたびは、高飛車じゃの。(無能な奉行め・・・と上から目線)なめられたものだ。長崎では決められぬ。江戸表に早馬をしたてなされ。指示を求めなされ。時間がかかってもやむをえぬ。引っ捕らえよ！ となるではあろうが。(狡猾な感じ・・・) どうじゃろう、先手必勝という。

相談じゃが、ご公儀の方針は、貴公もご承知じゃろう、もう決まっておる。こたびは、直ちに警備番の佐賀藩に捕縛を命じてはいかがか。たかが異国船一隻のこと。大事にはなるまい。現地奉行・目付としては、仮にその後いかなる事態となろうとも、責めは負うこともなかろう。やるのは佐賀藩じゃからな。至急、命じられてはいかがか。ふふ、それが妥当なところじゃろう。」

【長崎奉行所・場面展開・第5場】

オランダ商館員スヒンメル(一時的に解放されたのみアドレナリン満タン。緊張の極)

「商館長。奉行所の連中より先にお会いできてよかった。やつら、英国のフリゲート艦、フェートン号です。艦長は名乗りませんが、二十歳にも届かぬ青二才でした。高慢で、抜け目のない奴です。手紙は私が書かされました。ただ水・食料が欲しいとだけ書け・・・との指図です。その意図がわかりませぬ。通詞たちには「どこの船かわからなかった」と申しておきます」

カピタン・ドーフ（不審な様子）

「オランダ船狩りが目的か？　しかし、港の奥まで入り込んでくるとは、大胆なやつらだね。そのわりには、ただ水と食料？　通商交渉を求めているわけでもない？

ふむ、イギリス本国から派遣されたフリゲートか？　相当な重火器を搭載しているな。自信がなければ、こんな大胆な行動はとれないだろうね。下手をすると、港も長崎市中も火の海となるかもしれぬな。とすれば、商館員たちや、将軍家からの朱印状も待避準備をさせねばならぬ。

解せぬ事態だが、やつらの指示によれば、おまえをもう一度船に戻せとある。やむをえぬな、よいなスヒンメル。お奉行には、その旨念を押しておこう。一人でも戻れば十分とでもいわれれば、どうしようもないからね。」

長崎奉行所・松平康英（それまで我慢していたが、堰を切ったように一気にまくし立てる）

「押込強盗よろしく押し入って、水・食物を差し出せば、おとなしく出て行ってやる・・・（憤懣やるかたない様子）まして・・・バツエイラを巡らせて威嚇しておる。いかにも怯えて、いいなりのようではないか。（声の調子が高くなる）徳川の連枝、松平を名乗る以上、面目もある。腹に据えかねること、尋常でないのだぞ。

（しばらく間をとって、落ち着こうとする。そして、再び能吏らしく）とはいえ、忠実なカピタンの懇請だ。よし、よい。ここはいいなりになってやろう。しかしだ、堪忍袋にも限度はあるぞ。

（ここはきっぱりと言い渡す感じで）奉行所一同には戦支度を命じた。これから佐賀藩に捕縛の支度をさせる。人質を取り戻したら、目に物を見せる・・・それでよいな」

【長崎奉行所・場面展開・第6場】

長崎奉行所・松平康英（幕府高官らしく権威をもって）

「長崎警備年番。佐賀藩聞き役、関殿だな。関殿、日頃の鍛錬を見せる 때가来た。佐賀鍋島の力を見せてほしい。大村・諫早・福岡他九州各藩には後詰（ごづめ）の援軍を要請しておいた。お役目である。至急、異国船捕縛の支度にかかれ。場合によっては、貴藩単独でもやってもらおう・・・・・・。

(相手の様子に不審に思い)

いかがされた。関殿。なにか言いたきことがあるようじゃが」

佐賀藩聞役 (もはや言い逃れはできぬ。失態・・・やけくそ気味に)

「恐れながら申し上げます。当家へのご下命恐れ入ります。しかしながら、折角のご下命。果たせませぬ。できれば他家にお命じくだされば・・・」

(ええい、どうにでもなれ・・・)

「恐れながら、実は、長年の長崎警備番、費用の費えも多額に上ります。まして、一昨年・昨年と船は参りませぬ。それゆえ、今年もこの時節。もはや来航はないと、つい先日藩兵を密かに国許に戻しました。もはや、屋敷にはわずかしきありません。武具も武器も使えるものはなにもございませぬ」

目付 (幕命に反したことに仰天して)

「(脅すように・権威ぶって) なにい～、ただではすまぬぞ。許しもなく無断で、勝手に国許へ戻したと。(大声で) なんてること。陣抜けは切腹ものだぞ。(困ったような言い回しで) わしらの面目がたたぬではないか」

長崎奉行所・松平康英

(意外なことだが、佐賀だけで対処できることは想像できたので、多少落ち着いた様子で)

「そうとなれば・・・(やれやれという感じ) どうにもならぬな。奉行所役だけでは、人手も武器も足りぬ。捕縛は無理でしょう。援軍の到来を待つしかない。それまでは見張り・警備で手一杯となる。(最善策を探らねばならぬ・・・きっぱりとした感じ、ながら) とにかく集めるだけの人数を集めねばならぬ。そうござらぬか、目付殿」

目付 (まくし立てる)

「怠慢じゃ。図書頭殿、知らなかったではすまぬぞ。面目がたたぬ。こうなれば、兵の多寡は問題にならぬ。窮すればなおさらじゃ。ここは直ちに捕縛にかかるべきじゃ。ご公儀のご威光を損ねる所業、ひとときも許すわけには参らぬ。目付たる拙者にも関わる問題じゃ。江戸表にはその旨、寡兵ながら「ひと当て」いたす・・・また、早馬をしたてなされ」

長崎奉行所・松平康英（この馬鹿野郎・・・と力をこめて）

「カピタンは彼らの火力は思いの外、強力という。無理にかかれば、港内・市中も火の海になると恐れている。いまさら、彼らが下手に出るなど考えられん。商館員も人質のままでござる。殺されましようぞ。それに、江戸についた頃には全てが終わっておる」

目付（おまえは今の地位も将来も無くすかもしれないのだぞ・・・侮蔑の感じを出して）

「オランダ人が殺されようと、火の海になろうと、やるべきことをやればよい。オランダ人も覚悟はあるはず。火をかけられる？ それ位あたりまえだ。おそれぬに足らぬ。直ちに「ひとあて」されよ、火船の計（かせんのけい）じゃ。赤壁の例もある、大浦側が風上だ。戦には潮時がある。夜明けとともに風にのせて火船をしかけよ。（奉行が横を向いて、聞いていない。一気に冷めて）聞いておらぬな。目付たるワシの役目は果たしたぞ。よいな。後は貴公の智恵で解決されよ。ワシは屋敷に戻るぞ。馬鹿者め」

長崎奉行所・松平康英（事務的に）

「関殿。（権威をもって偉そうに）兵を国許に戻したことは後々詮議させてもらう。（てきぱきと）まずは直ちに呼び戻せ。どこからでもよい、集められる限りの兵を集めよ。年齢は問わぬ、隠居でも子供でも誰でもよい。各所で上陸を防がねばならぬ。出来るだけ早く、見張・警備を配置せよ。バツテイラが寄せてくれば、当座のことだ、意地にかけて、なんとかせよ。手数が揃うまでは隙をみせるな。（命令調で）関！しくじるな！」

【独白】 長崎奉行所・松平康英（つぶやくように）

「寡兵をもっても打ちかけだど……。ザルで水をすくえ……。か。船や油・薪に藁……。手間と金はどうする。寡兵もなにも、いないも同然だ。本当にやれると思っているのか。捕縛もできず、市中丸焼けとなれば、どうする言い訳するつもりだ。それこそ、面目まる潰れではないか。あの目付のことだ、奉行の失態と言い張るだろうな。**(いいきかせるように)**ここは耐えねばならぬ。人質交換で時間が稼げる。援軍があれば、捕縛にも人数がさける。多少の被害はあろうが、なんとかなろう。火船の計か……。火攻めは武家の習いだ。いい策かもしれぬな」

【長崎奉行所・場面展開・目付退去・夜半・第7場】

長崎奉行所・松平康英**(奉行所内：信頼に値する人物を演じながら、権威をもって、事務的に)**

「与力・同心はこれで全部か？　そうか、ワシはカピタンと約束した。まずは人質を奪回だ。佐賀はあてにならぬ。人手がない上、武具・武器も足りぬ。**(今に力をこめて)**今はどうにもならぬ。大村・諫早の援軍到着まで、時間稼ぎに専念する。

「水・食料はくれてやる」。談判を始めよ。

(当たり前のことのように事務的に)

ただし、談判の内容はいちいち奉行まで報告させよ。また、町役には船・船頭・藁・薪・油を梅が崎から大浦あたりに集めるよう指示を出せ。金は出す。船頭にも報酬を出す。

(リーダー然として自信をもって) 値は相場の倍とせよ。船は五十はいるぞ」

第7景 高銚島・フェートン号停泊地 翌16日 早朝

ご検視役・高銚島沖**(疲れている・途方にくれている……)**

「もうこれで何度目だ。菅谷殿。今度こそは首尾よく果たさねばならぬ。それにしてもこの船は太とか。ぶつかれば、こっちがお陀仏となるぞ。**(気を取り直して、やっとのことで勇気を振り絞って)**

やーやー。聞いておるか。お奉行さまのご沙汰である。謹んで聞け。おまえたちの願いの条。お奉行様には聞き届けの用意がある。必要な水と食料は届けよう、ただし、人質と引き替えと仰せである。やーやー、返事をせよ」

フェートン号艦長（きっぱり・問題外という感じ）

「だめだ・だめだ。飲めない水や食えない食料だと意味がない。確認するのに時間がかかる。そのあとで、人質は」

長崎奉行所ご検視役（あまりのいいように、ちょっと気色ばんで）

「なんばいうとか。卑劣なことなどいたさぬわ。武士の面目、約束したら、ちゃんと用意をいたす。それと、ひきかえに引き渡す・・・それでよいな」

フェートン号艦長（信用できぬ。門前払い、事務的に）

「信用できぬ」

長崎奉行所ご検視役（さらに気色ばんで）

「ちゃんと生きておらねば、望みの物は渡たさない。武士に二言なし。恥辱に等しい言いぐさだ」

フェートン号艦長（ばーか・・・という風に）

「駄目だ。奉行とやらの計ってこい。信用できぬものは、信用できぬ」

第8景 長崎奉行所 翌日16日 昼頃

【第1場】

長崎奉行所・松平康英（鷹揚な振りだが内心は焦っている。なによりも後詰め^の到着が前提条件）

「まだか。大村は何時（なんどき）の到着だ。菅谷たちの談判はあれでいい。一本気の小心者だ。このまま談判させておけ。いちいち戻って報告せよ・・・これだけは念を押しておけ」

長崎奉行所役人（奉行の気持ちを察して、お追従するように。事を論ずるように、訳知り顔で）

「お奉行。今回は前触れなしの突然のお召しでございます。それぞれ城下は右往左往でございます。長い太平でございます。陣立て・兵糧・火薬・武具。人数分そろえるだけでも一苦勞です。なにぶん、手慣れた者もおりませぬ。費用の手当も必要でございますし大慌てでございます。兵の到着はまだですが、大村丹後守様より、単騎先乗りする旨連絡が参りました。もうすぐ、参られます」

長崎奉行所・松平康英

（すこし気を強くしたが、部下に気取られぬように・・・あいかわらず鷹揚な振りで）

「丹後守殿は、この地ではご公儀「親戚扱い」、特別待遇だ。ただちに書院にお通しもうせ。軍議といったす故」

【長崎奉行所・場面展開・16日正午から午後にかけて・第2場】

長崎奉行所役人（事務的にテキパキと）

「菅谷・上川から今朝の談判の報告がありました。昨夜来、談判を続けておりましたが、今朝、かの船がオランダ国旗を下ろし、（イギリスに力をこめて）イギリス国旗を掲げたとのことです。さらに、舷側の砲門を全て開き、砲口を長崎市中に向けました。カピタンの話では、陸上砲並の十八ポンド砲約30、船舶攻撃用カロネード砲約20、近接砲約10を備えている由。乱戦となれば、港内の船、ことごと焼き尽くし、市中は火の海となるは必定と、申しております」

長崎奉行所・松平康英（思案顔で）

「イギリス軍艦か。大砲で脅しのつもりか。無礼者め。「風説書」では、フランス国王の外征に手を焼いていると聞いている。天竺・アラビアで手一杯とも聞いたが、わざわざなんのつもりだ？ そのうえ、たった、水・食料だけか？ なぜだ。本当に、水・食料だけなら、やりようがあるだろう。どうなっている？ イギリス・オランダ・・・バタビアあたりで騒動でもあったか？ ドーフは何も言わぬが・・・」

【長崎奉行所・場面展開・16日午後・第3場】

長崎奉行所役人（早口で、事務的に、多少興奮している）

「今度はホーゼマン殿が使わされて参りました。フェートン号艦長ベリユー大佐から手紙です。本日中の食料提供があれば、人質解放し、長崎港退去する。さもないければ、港内の和船・唐船一切を焼き払う。市中への砲撃も排除しない。ホーゼマンに返事を持たせよ。さもないければ人質を殺害する、とあります」

長崎奉行所・松平康英（いよいよ時がきたな・・・覚悟が決まってきて、口調は重々しく）

「水や食物が欲しければくれてやる。まず、人質だ。援軍到着まで時間を稼ぐ。奴等には、少しずつ小出しで渡せ。よいか。捕獲するぞ。丹後守軍勢500、諫早西郷勢300が明朝到着だ。もうしばらくの辛抱だ。きっと油断するな」

長崎奉行所ご検視役（命をかけ、眈を決しての・・・壮挙という覚悟。侍らしくきっぱりきっちり）

「お奉行。英艦向けの食料を持参します。肉類等はカピタンの手配で出島から牛4頭、やぎ12頭、市中から、にわとり10羽、水がわりの梨100個、それに、本河内から和船に4杯の清水を準備しました。直ちに人質引き取りに参ります。英艦乗員は300名近いと聞いています。これだけでは足りぬはず。大村様ご到着まで、時間を稼ぎます」

【長崎奉行所・場面展開・16日夕刻・第4場】

長崎奉行所役人（事務的に、要点のみを、要領よく報告・・・）

「英艦に出向きましたところ、水に毒が・・・と言い出しまして、なんたる言いぐさと小競り合いとなりました。当座の時間稼ぎには好都合でしたが、一応おさまりましたが、さらに、水の追加とタバコが所望され、それまでは人質は渡さぬと言い始めました。それと引替が条件といい始めました。武士に二言はない、間違いなく明朝届ける。今人質を返せ！と言い張って談判を重ねてございます」

【長崎奉行所・場面展開・16日夕刻・第5場】

長崎奉行所・松平康英（援軍到来。やる気が満ちてきている）

「丹後守殿。早々のご到着。祝着至極。イギリス軍艦でござる。人質を取り戻し次第、捕縛にかかります。火船（かせん）の計を仕る。いかがであろうか」

大村丹後守（こちら場所を得た、いっちょ、やってやるかとやる気満々）

「それはよい。さらに退路も断ちましょう。奴等の周りに石を満載して船を沈めるのですよ。廻船五杯もあれば十分でしょう。狭い水路でござる、足止めができれば、こちらのもの。拙者が先陣で切り込み、武士の意地を見せましょうぞ」

長崎奉行所・松平康英（調子にのってきた・・・すらすらと）

「では、更に偽計をつかまつける。「オランダとの交易を停止しイギリスとの交易を開く用意がある。相談いたしたし、役人を出向かせるゆえ待機されたい」旨の手紙を投げましょう。奴等の真意は奈辺にあるのか？ さて、どうするか」

【長崎奉行所・場面展開・16日夜半・第6場】

長崎奉行役人（事務的にテキパキと）

「お奉行。菅谷・上川の両名が人質を取り戻し書院に控えております。両人の申し様では、追加分を言い張っていましたが、ことのほかあっさりと、では追加分は明朝でよいと、人質を突き返されたようです。拍子抜けしたようで、ともかくご報告を、と戻ってきました。」

オランダ商館スヒンメル（緊張が解けてきたが、まだまだ興奮状態）

「お奉行様。この度はご配慮ありがとうございました。監禁されただけで、危害を加える様子はありませんでした。お奉行様からの下し物を頂戴し、大いに喜び宴席を張ってございました。われわれにワインを勧めまして、ともに祝えと言っておりました。本当に水や食料が不足していたのか、今思うと不思議でございます。勿論、砲門は開いたままです。出帆？その気になれば、明朝にも出帆できるのではないのでしょうか」

長崎奉行所・松平康英（まずい雲行きに・・・多少冷静さを失いかけて）

「手の内を読まれている。ここが潮と、間違いなく明朝出て行くつもりだ。おそらく、交易等には関心はない。水・食料もただの口実だ。我らを試すための侵入、威力偵察だったのかもしれぬ。今晚中に、火攻め・足止の準備を終ねばならぬ。石が足りねば、石畳でも石垣でも、なんでもつかえ。人手が足りぬなら、手当を三倍にせよ。いそがせよ。大村兵・諫早兵にも急がせよ。陣割りどおり到着次第配置につけよ。お目付にも「いよいよ着手」と伝えておけ。念のためだ」

第9景 高鉾島・フェートン号船上

フェートン号艦長（鷹揚に）

「また、あいつらが叫んでいるな。血相を変えて怒鳴っておる。これだけの大砲だ、怒りもするか。おい、大浦の入江を見ろ。なにか企んでいたようだ。小舟を集めて、油だろうか、藁のようなものとともに船に積み込んでおる。ただでは帰さぬつもりらしい。それにしても、右往左往だな。あの慌てようからみれば、まだ用意はできていない。兵も足りぬ。そこで時間稼ぎだ。では、さっさとすますか。申出承知したと言ってやれ。喜んで持ってくるぞ。いくらでも引延はできるしな。港の様子はよく監視しておけ。オランダ

船はおらぬし、日本の奴等を慌てさせ、一泡吹かせれば、それだけで土産話にはなるだろう。ケリをつけよう。明朝、抜錨・出帆だ」

フェートン号艦長（いらずら小僧のように）

「ふふふ、ちょろいもんだ。明朝、追加分も届けてくるという。約束は守る・・・武士に二言はない？信じるほど、（「おれは」に力が入る）おれはお人好しではないぞ。長居は無用。さっさとマカオに戻るべし。しかしまあ、オランダ人の従順ぶりには面食らう。文明人としての矜持がないのか。銃と大砲で脅せば十分だ。たった一隻にこの慌てようだ。砲台もなければ、軍艦もない。野蛮人らめ。威張りくさってはいるが張り子の虎だ。艦隊で押しかければ腰砕けだろう。いい土産話になる」

第10景 出島オランダ商館 8月16日深夜

オランダ商館員スヒンメル（同国人をみて気が緩み、大声になっている）

「商館長。なんとか戻ってこれました。ベリューという若者が艦長で、ベンガルからの長旅でマカオに入りよう中、オランダ船の噂を聞いて、出撃したようです。五島沖で待ち伏せしていたが、すでに長崎港に入港したかもしれぬと疑い、手柄ほしさに侵入してきたようです。

なぜ日本人にへつらうのだと居丈高に迫るので、郷にいらば、郷に従えというではないか、日本の法に従って商売をし、それで利益をあげている、と申しました。すると、鼻先で笑われ侮辱されましたが、じっと我慢しておりました。水や食料が到来いたしますと、艦長を始め大喜びで、我々にも祝宴へ加われと言われました。士官達はワインで祝っておりました。水・食料が事欠いていたようにも見えません。」

カピタン・ドーフ（事態を冷静に分析する・・・沈んだ声で・・・慎重に）

「ベンガルからマラッカを通り、ポルトガル領マカオで船の修理ができた・・・ということだな。イギリスはもう自由自在・やりたい放談というわけだ。台湾・中国、奴らの手の内ということか。今回は、イギリス坊やの火遊びだったんだろうが、実のところ日本が丸裸だということが分かったわけだ。日本にも手を伸ばせる、と踏むだろう。祝宴に値する手柄というわけだ。たった一隻の船で、日本最重要の港がこの体たら

くだからね。ところで、諸君。奉行は交易を持ちかけて時間稼ぎをするつもりのような。問題は援軍が間に合うか、間に合っても勝ち目があるかどうかだが、微妙なところだ。出帆は間違いなく明朝だ。乱戦となれば立山にでも駆け上がれ、まず、身の安全を図れ。よいな。（溜息）さても、ペリュー大佐の運次第・・・か・・・。」

第11景 稲佐恵比須神社境内 長崎奉行御座所 16日深夜

長崎奉行所役人（事務的に）

「お奉行。大村兵・諫早兵がぞくぞく到着しております。それぞれ配置つき、兵糧をとり、武具などの調製に入っております。大村公は諫早公とご相談され、陣割りを下知されております。大浦の準備もほぼ終わっているようです。残りの兵達の到着次第で準備完了です」

長崎奉行・松平康英（やきもきした様子で）

「日が昇りはじめたら、早速、追加の水とタバコを送りつけよ。同時に偽書の使者もついていけ。よい、少しでも時間を稼げ、ぐずぐずやれ。」

第12景 高鉾島・フェートン号停泊地

フェートン号艦長（軍人らしく、客観的に、冷静に。艦長としての威厳を込めて）

「あの入江を見てみよ。焼討ち用の小舟だ。大きな奴には石を積み込んでいる。沈船させるつもりだろう。やる気まんまんだね。手の内丸見えだ。オランダ商館あたりだが、「松明」の数が増えたようだ。船も揃いだした。着々準備中ということだな。いずれにしても今夜中の襲撃は無理なようだ。見張をたて警戒はしておけ。遠巻きの見張り船はほっておけ。近づく船にはぶっ放せ。月夜だ。見落とすなよ。全乗組員に、酒を一杯ずつだけ認める。景気づけの前祝だ。油断はするな。士官連中には義務を果たせ！ と厳命する」

【同所・場面展開・17日払暁】

フェートン号艦長（出航のタイミングをみている。冷静に威厳たっぷりに）

「水を運んできたぞ。二言はないか、まだ、引き留めておきたい、ということだな。ありがたく頂戴しておけ。受取り次第、直ちに抜錨だ。文句をいえば、かまわぬ、海にたたき落とせ」

長崎奉行所役人（大事や役目だ・・・緊張感にみちみちて）

「おおい、お奉行さまの書状を持参した。艦長に取り次げ。おい、どうなっている、とりつがぬか・・・。なんだ、船の様子が違うが、碇をあげる準備をしておるぞ。みろ、帆柱にも人が張り付いている。これは出帆する気だ。いい具合の風が吹いてきた。これはまずい。引き留めねばならぬ」

「おおい、お奉行さまの書状を持参しておる。艦長に取り次げ・・・（一世一代の大声で）やい・・・とりつぐのじゃ」

フェートン号艦長（威厳も余裕もたっぷりに。次第に、テキパキと）

「書面を艦長に取り次げと、ほっておけ。水とタバコは積み終えたか。終えたら出帆だ。よし、錨を巻き上げよ。抜錨だ。総員かれ！ メインマスト全開せよ。360度回頭。舳先を港外に。よし、向きがかわるぞ、右舷の砲門を閉じ、左舷全砲門開け。全砲、左舷に移せ。いいぞ、半速のまま、すすめ。見張番、岩礁注意だ。航路を誤るなよ。ちょうど良い風だ。よし、全帆を開け、速度がのるぞ。やつらの「たらい船」では追いつけまい。全速前進だ！」

第13景 稲佐恵比須神社境内・長崎奉行御座所

長崎奉行所役人（テキパキと）

「お奉行。兵800名配置完了。それぞれ持ち場につきました。偽計の使者は ほれ、あのよう、相手にされず、周りで漂っております。丹後守様の采配で出撃の手配です。」

やや、英艦が抜錨を始めました。中と後ろのマストに白い帆が見得始めました。回頭を始めます」

長崎奉行・松平康英（慌てた様子で）

「まずいぞ。合図の狼煙はあがったか。まだか、まだか。大浦の様子はどうか」

長崎奉行所役人

「ちょうどの東風です。もはや、火船・石船は追いつけませぬぞ。狼煙があがりました。すわと、軍船が何艘か、先陣で漕ぎ出しました。おお、後から、後から、漕ぎ出して参ります。が、どうもいけませぬ。櫓数は足りておりますが、ちょうどの東風です。イギリス船と船足が違います。英艦が回頭を終え、伊王島に向かって速度をあげ始めております。寄せ手も追いかんとしておりますが……。あれから先は外洋です。逆さ波（さかなみ）で和船では追いつけませぬ。やつらの船足が上がってきました。ああ……………」

第14景 長崎奉行所・書院・奉行座所

長崎奉行・松平康英

（一件落着・「あきらめ」と「冷静さ」がもどってきた、昔の記憶をたどるように）

「さてさて、それにしてもお粗末なものだ。海戦（うみいくさ）にあの格好はどうだ。源平の船戦（ふないくさ）のつもりか。大村勢が、あと一刻（二時間）ばかり早はやければ、勝ち負けはともかく、勝負にはなったかもしれぬ。

それにしても、威勢はいいが、勝手次第で動きまわる。怖がってグルグルと同じところを回る。勇んで先陣をきったはいいが、続く者達がおらぬでは、丸見えだ。火縄はぬれるは、弾の装填はできぬは。（溜息）無駄に狙い撃ちされただけだ。昼水練か。とはよくいったものだ。これが我が方の実力とはな」

目付（ここは威厳を保って、奉行の責任を強調しておかねば…………）

「図書頭殿、取り逃がしたとな。この件、ご公儀には委細詳細にご報告申し上げる。拙者は、戦は勢いであるをもって、まず、一あてすべしと、申し上げたはずじゃ。オランダ人などに義理立てをして、戦機を失ったのは貴殿の優柔不断さがもたらしたものの、きっと、お覚悟の上、ご沙汰をお待ちするように」

長崎奉行・松平康英（つぶやいて）

「目付殿は勝手なことをいうわい。火の海になろうとも・・・か。そのときはワシの短慮のための失態・・・となるわけか。わかったようなことを言うだけって、後は上手くやれときた。おまえがやれと言いたいところだが。

まあ、焼け野原にはならず、すんだわけだ。

が、侮られた。奴等、これから次から次に押しかけてくるだろう。まわりは海。どこからでもだ。どうする。どうすればよい。

（溜息）

佐賀藩不行届だけではすまぬな。目付の様子では、俺もただではすまぬ。当てつけに切腹してやるか。意地をみせねばなるまいて。思えば、あの船も無謀なものだ。

今朝の風には感謝せねばならんな。

やれやれ、小禄の俺が四方八方手を尽くして、そして、苦勞のすえやっとの得た長崎奉行の地位だが・・・。やっそこさの晴れの役職であったのだが、たった三日ではあになってしまった。さて、借銀をどうするか」

第15景 出島オランダ商館 後日談 数ヶ月後

オランダ商館員スヒンメル（遠い昔をなつかしむような感じで）

「商館長。お奉行の覚悟の切腹。大騒ぎでございましたな。新奉行が着任し何事もなかったようで。本当にあったことかと不思議な気持ちになります」

カピタン・ドーフ（これも懐かしむ様子で）

「この国の中でも、特に、潔い身の処し方だったね。イギリス坊やの気まぐれとすれば、運命とは皮肉なもんだ。佐賀藩の聞役や諸役も国許に召喚される道中で切腹した。何人が死んだことになる。佐賀藩主も隠居引退だ。これで幕府も本腰で沿岸防備に力をいれるだろうが、こう愚弄されたらご威光もあったものではない。こうもあっさりと入り込まれると、江戸も大阪も怪しい限り。丸裸同然だ。

（威厳をもってきっぱりと、言い含めるように）

そうだ。我々としては覚悟せねばなるまい。いずれイギリスは来る。となれば、アメリカもロシアもフランスも、くるだろう。海はもはやこの国を守ってはくれない。オランダ本国の復活がいつか、それは分からない。しかし、今も貿易特権は我々オランダ人にある。

が、肝心の船はこない。うち捨てられたような境遇だ。酒もタバコも、着替えも靴も、なにもなくなる。これから何年続くのかも分からない。

（さらに言い含めるように、自分に言い聞かせるように）

耐えねばならないのだ。諸君、今後の苦難に覚悟をきめたまえ。神の思し召しのままに・・・だ」

後説

長崎奉行・松平康英は、8月17日夜、長崎奉行所西役所・庭にて切腹して果てます。次のような、幕府あての書簡を残していました。

その1 オランダ人を奪い取られる等、日本の恥辱であり、ご公儀の威光を汚した

その2 英艦からボートが長崎港を巡航したが、これを想定できず、思うがまま、の行動を許し、妥当な対応ができなかった。

その3 佐賀藩が兵力の大部分を秘密裏に国許に戻していたことを知らなかった

その4 人質をとられていたとはいえ、先方の恫喝に屈してしまった

その5 援軍到来がもう4時間はやければ焼き討ちなども可能であったが、かなわなかった。という内容のようです。

現役奉行の切腹事件であり、江戸の幕府のその重大さに気づいたようです。

その後、佐賀藩・福岡藩による長崎港警備のための、砲台建設などが一気にすすむことになります。

他方、全国諸藩に海防のため、砲台建設が勧奨され、洋式武器の研究、洋式軍隊の編成などの研究がはじまっていきます。この事件をきっかけに、長い泰平の時代から、変革・動乱の時代へときりかわっていきました。そして、この後、蘭学・洋学修学熱がいきなり高まっています。

そして、次第に、外国の脅威が現実味をおびるにつれ、国内には攘夷運動の萌芽が生まれます。従来の尊皇運動とこの攘夷運動が結びついたとき、強大な倒幕エネルギーとなって噴き出していきます。当然のように、武器貿易港として、長崎はさらに発展することになります。

他方、この翌年、オランダ船は小型船が1隻だけ長崎に来港。ただし、小型船のため、商館員たちのための物資は積載されていなかったようです。その後は、4年後、5年後に、バタビアを占拠したイギリス船が二隻ずつ来港したにすぎませんでした。オランダ本国船が来航するのは、8年後まで待たねばなりません。この間、オランダ商館員たちは、欠乏する物資と心細さに耐え続けます。カピタン・ドーフは、この間、日蘭辞書「ズーフハルマ」を編纂しましたが、これも幕府からの生活資金援助の一環だったようです。

平成24年8月21日

企画・製作 NOCS 長崎卸センターサービス株式会社 skasase

この著述は、上記NOCSのオリジナルであり著作権は同社に属します。

ただし、朗読を担当された「やまだ眸月真」さんが、その朗読活動におけるテキストとして使用することは包括的に認めております。さらに、一部の言い換え、改変、大幅な省略等も可としております。

なお、このテキストの内容は、吉村昭氏「三色旗」等の著作やその他の書籍によっておりますが、それぞれの書籍においても、多少の相違があり、NOCSにおいて創作した部分を含みます。よって、歴史的史実とは相違する部分もありえますし、当然、登場する人物の人物像や性格なども、全くの創作です。歴史的人物としての長崎奉行松平康英の名誉・評価を覆す試みではありません。念のため。

なお、本台本については再三の見直しを行っておりますが、万が一、誤字脱字等あれば、ご指摘ください。当社あてmailなどでご連絡いただければ幸いです。電子本につき、ただちに修正・訂正ができますので。